特集
ドイモイ30年
―模索するベトナム―

ドイモイ期における戦後処理と戦争の記憶

今井 昭夫

一九八六年に採択されたドイモイとは、約三〇年間（一九四六～一九七五年）に及んだ抗仏・抗米戦争のなかで形成されてきた戦時体制の社会主義を平時のそれに転換するものであったと考えられる。ベトナム共産党は、民族解放・統一の達成をその支配正当性の源泉としてきたが、経済発展や工業化・近代化を新たな正当性の源泉とし、そのためにより適合的な社会システムに切り替えていくことがドイモイであった。とはいえ長年の戦争による甚大な影響は簡単にぬぐえるものではない。本稿では、ドイモイ期におけるベトナム戦争などの戦後処理や戦争の記憶の推移をたどり、ベトナム社会に戦争の影響がいまだに重くのしかかっていることを検証していきたい。

●ベトナム戦争の戦後処理

(1)ベトナム戦争の後遺症

ベトナム戦争はベトナムでは「抗米救国抗戦」とも呼ばれ、その時期は一九五四～一九七五年だとされる。長期にわたるベトナム戦争の被害は甚大で、最近のベトナム側の公式発表によると、民間人においては死亡者二〇〇万人近く、重傷を受けた人が二〇〇万人以上、ベトナム人民軍隊（南部解放軍を含む）の兵士は死亡者約一一〇万人、傷病兵六〇万人、行方不明戦死者三〇万人にのぼるとされている（参考文献①）。

現在も残るベトナム戦争の後遺症の主なものには三つある。①約三〇万人の行方不明戦死者の遺骨・墓の捜索。遺骨収集は精力的に進められているものの、不明者が依然多く、身元確認でDNA鑑定なども行われるようになっているほか、「外感」（ゴアイカム）と呼ばれる霊能者による捜索も一九九〇年代から始められ、これらの霊能者による的中率は三〇～七五％だといわれている（『ベトナムプラス』紙、二〇一三年一一月六日付）。②地雷除去・不発弾処理。ベトナムでは不発弾が残っている所は六万六〇〇〇平方キロに及んでおり、六〇万トン以上の地雷が残されている。除去された地雷はたったの二〇％にすぎず、今のペースで除去作業をしていくと除去し終えるのに三〇〇年かかるといわれている（参考文献①）。③枯葉剤被害者の支援と枯葉剤汚染地区の除染。ベトナム戦争中、アメリカ軍により枯葉剤約八〇〇〇万リットル（ダイオキシンの量にして三六六キロ）がベトナム南部の二四・六七％の地域に散布された。これにより二〇〇万ヘクタール以上の森林が破壊された。戦争中に約三〇〇万人が枯葉剤を浴び、約四八〇万人が感染し、先天的奇形児が約一五万人出生した（参考文献①）。

以上のように、ベトナム戦争の後遺症をベトナムは今なお抱えているのである。

(2)市場経済化のなかでの戦争・革命功労者への顕彰と「優遇」

戦争を遂行し人民を動員していくために、戦争・革命功労者の顕彰と「優遇」措置は不可欠であった。一九四五年のベトナム民主共和国建国以来、これらの制度は徐々に整備されてきた。「英雄宣揚」（「英雄」の称号には「武装勢力英雄」と「労働英雄」がある）についていうと、抗仏戦争中の一九五〇年代初頭から本格的に開始され、ベトナム戦争中から中越戦争勃発時（一九七九年）の時期まで活発に行われていた。しかし一九八〇年代は低調で、ドイモイが開始されてからもしばらくはその状態が続いた。アメリカのベトナム史研究家フエ・タム・ホー・タイによれば、ベトナムはドイモイにより大文字の「歴史」を失い、ドイモイの副産物として戦争のコメモレーション（記念）が盛んに

なったという（参考文献②）。しかしドイモイが開始されてからしばらくの間、「英雄宣揚」に関していえば低調であり、ドイモイが始まってすぐにこのような変化が生じたのではない。

ドイモイ開始とほぼ同時期、一九八六年に南部において結成された非官製組織「旧抗戦者倶楽部」は、党内の刷新の動きを擁護するために南部出身の古参幹部・軍人達が中心メンバーとなっていた。同倶楽部は、当時の官僚主義、汚職・腐敗に反対の声を上げ、ハノイがベトナム戦争終結後に性急に南北を統一し、かつての南部における民族統一戦線をないがしろにしてきたことに不満をもっていたともいわれる。一九八〇年代末の東欧社会主義諸国の崩壊を目の当たりにして、ベトナム当局は思想・文化の締め付けを厳しくし、同倶楽部は一九九〇年代初頭には解散に追い込まれた。それに代わって一九八九年一二月に官製の「ベトナム退役軍人会」が初めて設立された。同会は共産党員の有力な供給源の一つとなった。同会は「政治・社会組織」としてベトナムの政治過程においてもしかるべき位置を占め、退役軍人の声を政治に反映させている。同会は二〇一四年時点で会員数が二八〇万人となっている（『ベトナムプラス』紙、二〇一四年一二月二日付）。

一九九一年の第七回党大会で傷病兵と烈士（人民軍隊側の戦死者）の家族に対する生活保障の重要性が唱えられ、一九九四年には戦争・革命功労者へのさまざまな便宜供与をはかる「革命活動家・烈士とその家族・傷病兵・抗戦活動家・革命援助功績者を優遇する法令」（以下、「優遇法令」）と「『英雄的ベトナムの母』国家栄誉称号を規定する法令」（「英雄的ベトナムの母」とは、烈士の息子が複数いる等の母親）の二つの「法令」が制定されるなどの動きがあり、一九九〇年代なかばから「英雄宣揚」は再活性化した。また、一九九〇年代に入ってから、戦没者墓地や慰霊碑などの建設・整備も活発化し、社会保障や哀悼の面が強められた。全国には現在、戦争・革命功労者の対象となっている人は総人口の一割近くの八八〇万人以上おり、そのうち一四七万人以上が国家から軍人恩給など、毎月優遇手当を受給している（『ベトナムプラス』紙、二〇一五年四月一四日付）。「英雄的ベトナムの母」に認定された女性は二〇一五年時点で約七万人いる（『バオモイ』紙、二〇一五年三月二五日付）。枯葉剤被害者はベトナム戦争終結三〇周年記念の中心にすえられ、二〇〇五年に改正された「優遇法令」では、その対象者とされるようになった。現在、枯葉剤被害者支援金を受給している人は二〇万人以上に及び（『ニャンザン』紙、二〇一六年六月八日付）、ベトナム政府は毎年、枯葉剤被害者の手当の支給や、健康管理・リハビリおよび枯葉剤の大きな被害を受けた特別困難地区の支援に一〇兆ドン余りを支出している（『ベトナムプラス』紙、二〇一六年九月二日付）。

(3) 対外関係の多極化と対米関係の正常化

ドイモイ下で対外関係の多極化をはかるなか、ベトナムは対米関係を正常化するのにベトナム戦争終結後二〇年を要した。一九七八年にベトナム軍がカンボジアに進攻したことによって、アメリカや日本はベトナムに対し経済制裁を行ない、ベトナムは一九八〇年代には西側諸国からの大規模な経済的支援を得ることはできなかった。一九九一年のカンボジア和平成立と中国との国交正常化およびソ連崩壊が転換点となった。一九九四年、アメリカはベトナムへの経済制裁を解き、ベトナムは行方不明アメリカ兵の捜索などでアメリカとの協力関係を次第に構築していき、一九九五年に両国は国交を正常化した。二〇〇〇年には米越通商協定を締結し、これ以降、ベトナムの対米輸出は急増した。二〇〇〇年にアメリカ大統領として戦後初めてクリントン大統領が訪越した。二〇〇五年の解放三〇周年記念日のベトナム共産党機関紙『ニャンザン』社説では、「アメリカ帝国主義」に対する名指しでの非難は控えられるようになった。

一方、アメリカはベトナムの枯葉剤被害者への加害責任と国家補償を否定しつづけているため、二〇〇四年にベトナムの枯葉剤被害者たちはニューヨークの連邦地裁に枯葉剤製造会社を相手に集団訴訟を起こした。二〇〇九年、アメリカ連邦最高裁が損害賠償請求を棄却した。しかし、アメリカ政府は、ベトナムにおいて枯葉剤被害者とダイオキシンのホットスポットが存在することは認め、二〇〇六年に米越の政府間で「ベトナムの枯葉剤解決問題における健康と

環境処理のプログラムに関する覚書」を交わした。アメリカ国際開発庁とベトナム国防省は、二〇一二年からダナン空港での除染プロジェクトを始め、二〇一六年に第一段階が終了した。このように両国間ではベトナム戦争後遺症を乗り越えるさまざまな取り組みがなされている。また南シナ海問題などで中国に対抗して軍事的連携も図られるようになっている。二〇一六年にはオバマ・アメリカ大統領の訪越に際し、対越武器輸出の全面解除もなされるようになった。

(4)民族和解・民族大団結

ベトナム戦争は、ベトナム人同士が戦う戦争でもあった。それによって生じた亀裂は、南北統一後から現在に到るも根深いものがある。反革命成分とみなされた人およびその家族の就学・就職を制限するなどの「履歴主義」による差別はドイモイ後、少なくなったとはいえ、まったく解消されたわけではない。ベトナム政府は枯葉剤被害者に対し月々の支援金を支給しているが、革命功労者への報奨という枠組みで行なわれているため、旧サイゴン政権関係者の枯葉剤被害者はその対象外となり、これらの人はより金額の少ない身体障害者支援金に頼らざるをえない。このような旧サイゴン政権関係者への差別はいまだに存在している。ベトナム戦争が終結した四月三〇日を「戦勝記念日」とすることに複雑な感情を抱く南部人は多い。またベトナム戦争後に社会主義体制を嫌って出国していった二〇〇万人にのぼるともいわれる「越僑」の人たちの力を経済発展にいかに活用していくかという問題もある。一九九〇年代初め、戦後の民族和解や経済発展をめざし「過去を閉じて、未来に向かう」というスローガンが「越僑」に向けて、さらには外交上の中越国交正常化や米越国交正常化などの際に謳われるようになった。

二〇〇〇年にホーチミン市で開催された「サイゴン解放二五周年記念式典」では、戦後早くに北の組織に吸収されたために表舞台から退いていた南ベトナム解放民族戦線の旗が公式の場で復活した。第九回党大会（二〇〇一年）では「全民大団結」路線が打ち出され、二〇〇三年には「豊かな民、強い国、公平・民主的・文明的社会のために全民族の団結の力を発揮することに関する」党中央決議二三号、「民族工作に関する」二四号決議、「宗教工作に関する」二五号決議、それから二〇〇四年には政治局三六号決議「在外ベトナム人に対する工作について」が相次いで出された。これは、経済発展の一方で生じた経済格差などによる国民統合の亀裂への対応であるとともに、南北分断やベトナム戦争のもたらした積年の亀裂に対応するものであったと考えられる。経済的貢献が期待される在外ベトナム人に対しては外国投資法だけではなく国内投資促進法などの適用も認可した結果、一九八八年には六件総額約三五〇万ドルであった在外ベトナム人の投資も、二〇一二年には三五〇〇件総額約一一〇億ドルへと増加した（参考文献③）。

●ドイモイ期の「戦争の記憶」

ドイモイにより戦争についてのベトナムの人々の見方や語り口も変化した。一口でいうと、冷戦期型の戦争の記憶はポスト冷戦期型のそれへと転換されることになった。冷戦期型の戦争の記憶とは、東西陣営の対立を背景に、敵か味方かの厳格な二分法に立って、敵である旧南ベトナム政府・軍関係者やアメリカ軍などの国内外の「階級敵」を差別し、共産党をはじめとする世界の「革命潮流」の勝利・栄光を誇示するものだといえる。一九八〇年代末から一九九一年のソ連崩壊の前後に多少の揺れ戻しはあったものの、大まかにいって、一九八〇年代なかばからの「修正主義」の映画や「反抗文学」にみられるように、プロパガンダ的語りから脱し、戦死した兵士への個人的な想いや記憶に目が向けられる語りが文芸などでされるようになった。

「修正主義」映画のはしり「一〇月になれば」（ダン・ニャット・ミン監督、一九八四年）は、夫の戦死を簡単には受け入れることのできない妻の苦悩を描き、その悲しみを乗り越えることの大切さを訴えた。グエン・フイ・ティエップ原作の映画「退役軍人」（グエン・カック・ロイ監督、一九八八年）は、ドイモイ以降の市場経済化によって権威を失い、妻の拝金主義ぶりに圧倒されていく退役将軍の姿が描かれ、「戦争の記憶」が陳腐化していることを示している。映画「私を許して」（ルー・チョン・ニン監督、一九九二年）は、戦中世代の監督に恋心を抱きつつも、戦

争にこだわり続ける彼に違和感を覚える戦後世代の女優の葛藤を描き、世代間ギャップが表面化していることを示している。「反抗文学」の代表作である一九九〇年代初頭のバオ・ニン原作『戦争の悲しみ』（参考文献④）は、戦争における解放軍の否定的な面を描いたという非難の声があがり、一時発行停止となった。このように「修正主義」の映画や「反抗文学」で戦争の陰画の部分も描かれるようになったが、それらは、共産党の優れた指導によって「抗米救国抗戦」に勝利をおさめ、民族解放・南北統一を成し遂げることができたとする公式的記憶を真っ向から否定するものではなかった。

ベトナム戦争終結三〇周年の二〇〇五年には、若くして戦死した女性軍医の日記『トゥイーの日記』（参考文献⑤）や『永遠の二〇歳』がベストセラーになった。若くして戦死した普通の兵士の日記であるという点と、出征兵士の恋愛話をからめた点が新しい点で、若者の読者をも惹きつけた。二〇〇八年出版のホアン・ミン・トゥオン『神々の時代』（参考文献⑥）は、「ボートピープル」など、かつての南ベトナムの人々の戦中・戦後体験も含め、二〇世紀後半史を描いた点で画期的であり、ベトナム国内で初めて登場した、戦争を描いた大河小説ともいえる。

二〇一〇年代に入ってからみられる変化は、ベトナム戦争以外の戦争の記憶が相対的に存在感を強めてきていることである。南シナ海問題がホットイシュー化し、中越戦争やカンボジア戦争、チュオンサ（南沙）諸島での中国軍とのガックマーの戦い（一九八八年）の記憶などが浮上してきた。中越国交正常化以降、中国側への刺激を避けてそれらを文芸等で取り上げるのはいわばタブー視されてきた。中越戦争、とりわけ一九八四年のヴィスエンの激戦を扱ったグエン・ビン・フオンの小説『上る車、下る車』は国内では出版できず、二〇一一年にアメリカで出版された。しかし近年になり状況が少し変化したのであろうか、二〇一四年になるとこの小説は『わたしと彼ら』とタイトルを変えて国内で出版され、二〇一五年にはハノイ市作家協会賞を受賞した。二〇一六年、高校の歴史教科書に中越戦争に関する記述があまりに少ないとの批判の声を受けて、教育・訓練省は新しい教科書の内容に国境戦争と島嶼戦争を容れる検討をすることになった（『ダイドアンケット』紙、二〇一六年三月六日付）。今後、ガックマーの戦いや二月一七日の中越戦争開戦日がどれだけ記念行事として催されるのかどうか、一九七四年にホアンサ（西沙）諸島で中国軍と戦って死亡した旧サイゴン軍兵士を「烈士」と認定するかどうかと並んで、文芸において中越戦争がどう扱われていくのかは、これからのベトナムの対中関係を測るリトマス紙の一つとなるであろう。

二〇一六年はベトナム戦争中の韓国軍による虐殺事件が頻発した年の五〇周年記念ということもあり、ベトナム国内の幾つかのマスコミでもこのことを取り上げた。『トゥオイチェー』紙は九月一一日～一七日にベトナム中部での韓国軍の虐殺に関する記事を連載した。一四日付けの記事では、ビンディン省人民委員会が韓国政府に対し、虐殺への謝罪と被害者およびその家族への責任を負うことを求める手続きを始めたと紹介している。従来、こういったことに抑制的であったベトナム側が、今後どういった動きをするのか注目される。

（いまい　あきお／東京外国語大学大学院教授）

《参考文献》

① Vũ Quang Hiển, “ Hậu quả của cuộc chiến tranh Việt Nam (1954-1975) Mấy vấn đề bàn luận,” *Nghiên cứu lịch sử số*, 4-2015. pp.44-55.

② Hue-Tam Ho Tai ed., *The Country of Memory, Berkley*, University of California Press, 2001, p.4.

③古屋博子「第九章　越僑　海外在住ベトナム人との関係」（今井昭夫・岩井美佐紀編『現代ベトナムを知るための六〇章』第二版、明石書店、二〇一二年）六四ページ。

④残雪著、近藤直子訳／バオ・ニン著、井川一久訳『暗夜／戦争の悲しみ』世界文学全集一―六、河出書房新社、二〇〇八年。

⑤ダン・トゥイー・チャム著、高橋和泉訳『トゥイーの日記』経済界、二〇〇八年。

⑥ホアン・ミン・トゥオン著、今井昭夫訳『神々の時代』東京外国語大学出版会、二〇一六年。